

1959年

岸内閣が推し進める日米安保条約改定問題に議論が沸騰、中国は建国十周年の年にあたり、四月に劉少奇氏が国家主席に就任した。中島健蔵理事長が五月に北京を訪問、

五七年に続き、当協会と中国人民対外文化協会との間で「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」を締結した。中国側著名者は陽翰笙氏、郭沫若、楚図南、廖承志の諸氏らが同席した。

日中間に国交がなく、往來に困難や障害が山積していたこの時期、民間の文化交流を促進するための基礎となったこの共同声明の締結は一九六七年まで続けられた。

五九年の主な交流

◎2月 文学座、俳優座、民藝三劇団合同による「閩漢脚」(作・田漢、演出・田是也)が東京で公演される。日中国交正常化の必要性を国民に呼びかけ、早期実現を日本政府に要望するために設けられた日中文化関係懇談会の



「日中文化関係懇談会」が発足 1958年5月2日の長崎国旗事件によって、それまで積み上げ方式で発展していた民間交流は重大な局面に陥った。当時の日本政府がとっていた中国敵視政策に対し、文化界が団結して行動しようと、59年2月21日に発足したのが「日中文化関係懇談会」。報告を行なう亀井勝一郎氏(左)。千田是也、中野重治、松岡洋子、海老原光義、白土吾夫ら諸氏の顔も見える —東京・学士会館



1957年に続き、第二回目の文化交流に関する共同声明を発表した。調印書を交わす中島健蔵理事長(左一)と陽翰笙対外文協副会長(右二)。同席した郭沫若(左二)、楚図南(右一)らの諸氏

—1959年6月8日 北京・中南海

《文学》青野季吉、阿部知二、石川達三、井上靖、宇野浩二、亀井勝一郎、久保田万太郎、多田裕計、中島健蔵、中野重治、堀田善衛、山本健吉、《学術》貝塚茂樹、倉石武四郎、桑原武夫、近藤康男、坂田昌一、末川博、土岐善麿、南原繁、原田淑人、増田渉、吉川幸次郎、《婦人》羽仁説子、松岡洋子、丸岡秀子、《演劇》宇野重吉、尾崎宏次、木下順二、杉村春子、千田是也、戸板康二、《舞踊》石井漠、小牧正英、高田せい子、花柳徳兵衛、松山樹子、《映画》牛原虚彦、内田吐夢、小津安二郎、乙羽信子、衣笠貞之助、島崎清彦、新藤兼人、田口助太郎、田坂具隆、野田高梧、望月優子、八木保太郎、吉村公三郎、《美術》北川桃雄、谷川徹三、中川

一政、福田豊四郎、《写真》木村伊兵衛、田村茂、土門拳、名取洋之助、渡辺義雄、《書道》西川寧、豊道春海、《音楽》山田耕柁、《宗教》阿部義宗、賀川豊彦、《出版・報道》下中弥三郎、白石凡、高木健夫、吉野源三郎。

◎5月 中島理事長らが訪中、「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」締結。

◎9月 七十有余の民間団体の編成派遣による国慶節祝賀訪中日本代表団(片山哲団長、小畑忠良、白石凡、本多正登、田畑忍、白土吾夫、岩垂寿喜男らの諸氏三十名)。中国側七団体と共同声明に調印。中国側著名者は次の諸氏。郭沫若、劉寧一、廖承志、蔡暢、張奚若、楚図南、劉西元。十月一日、毛沢東主席、周恩来総理と会見。

◎10月 日中国交回復実現中国国慶節祝賀中央集会(千駄ヶ谷・東京都体育館)中島健蔵理事長が座長となり、六十四団体が共催。六千人が参加。

技術革新が急速に進みはじめ日本経済の規模が飛躍的に大きくなり神武景気以上だという意味で岩戸景気と呼ばれた。昭和基地に一年間放置されたタロとジロの生存が確認され、ダーク・ダックスの「雪山讃歌」が街に流れていた年だった。創立時八十名の会員でスタートした当協会は、交流の拡大にもなっており、会員も増え、ようやく運営が軌道に乗る兆しをみせ始めた。



〔上〕中国作家協会の周揚副主席(中)、作家の蕭三氏(左)と「アジアにルネッサンスを」と語り合う中島健蔵理事長
——一九五九年五月三十日 北京・作家出版社



共同声明調印のため訪れた北京で廖承志氏(右)の迎えを受ける中島健蔵理事長
——一九五九年五月二十五日 北京空港



歐陽予倩氏(中)、陽翰笙対外文協副会長(左)と歓談する中島健蔵理事長 本誌題字「日中文化交流」は、中国話劇の草分けで著名な劇作家である歐陽予倩氏の揮毫による
——一九五九年六月八日 北京・政治協商会議文化クラブ



〔下〕中国音楽家協会を訪れ、(右から)楊蔭瀏、查阜西、馬思聰の諸氏と歓談した中島健蔵理事長(左一)
——一九五九年六月四日 北京



李徳全氏(右)は、新中国成立後最初の中国紅十字会代表団の団長として一九五四年に來日した。再会を喜ぶ李徳全氏と中島健蔵理事長
——一九五九年六月八日 北京・政治協商会議文化クラブ



文学座、俳優座、民藝の三劇団新劇合同公演による田漢作「関漢卿」東京公演 関漢卿に扮しているのは滝沢修氏(右二)、朱廉秀役は山田五十鈴氏(右三)。「関漢卿」は、十三世紀に活躍した劇作家。中国で一九五八年度の世界七大文化偉人の一人に選ばれ、同年中国では「関漢卿」の作品が新劇、映画、出版などで大々的に紹介された
——一九五九年二月

1960年

日米安保条約改定反対闘争が全国的な広がりをみせ、岸首相が退陣後、池田勇人内閣が所得倍增計画とともに登場した。中国が自然災害に見舞われる中、中ソ論争が公然



日本の新劇人と歓談する周恩来総理(前列左二)は「演劇交流は大きな意義をもっています。私も若いときはよく芝居をやりました」と訪中公演日本新劇団のメンバーに語った。(前列右から)杉村春子、岸輝子、千田是也、山本安英、村山知義(左二)の諸氏

一九六〇年十月八日 北京・中山公園

化、ソ連が対中援助打ち切りを通告。このような状況の中、当協会は、前年に中国人民対外文化協会との間で結んだ文化交流に関する共同声明に基づき、前進座訪中公演団、日本作家代表団、五劇団による訪中公演日本新劇団など、大型の代表団を中国へ派遣した。



日本現代画展が北京で開幕 開幕式に出席した日本美術家代表団の(前列左から)岩橋英遠、小倉正子、楚図南中国人民対外文化協会会長、前田青邨団長、白石凡副団長、竹間吾勝(後列左から)北川桃雄、西山英雄、(一人おいて)河北倫明、秋山光和、吉岡堅二、木村菊男の諸氏

——1960年6月18日 北京

△六〇年の主な交流

◎2月 劇団前進座訪中公演団(河原崎長十郎団長、中村翫右衛門副団長、宮川雅青副団長、佐藤純子秘書ら)一行六十七名、四十五日間にわたり「鳴神」「俊寛」「佐倉宗吾郎」「勸進帳」を公演。

◎3月 写真展「文学者の見た中国」(主催・当協会など、銀座・富士フォトサロン)。「中国文字改革視察」学術代表団(土岐善磨団長、有光次郎、倉石武四郎、実藤秀亮、宮沢俊義、原富雄、高杉一郎らの諸氏)訪中。

◎4月 「日本書道展」(中国人民対外文化協会、北京書道研究会主催)を北京、上海、青島、濟南で開催、日中交換書道展の一環。

◎5月 日本作家代表団(野間宏団長、亀井勝一郎、松岡洋子、竹内実、開高健、大江健三郎、白土吾夫の諸氏)訪中。上海で毛主席、周総理と会見。

◎6月 「中国現代版画芸術展」(主催・当協会など、日本橋・白木屋画廊)開幕。「日本現代画展」(主催・中国美術家協会、当協会など)が北京の故宮・文華殿で開催、日本美術家代表団(前田青邨団長)が出席。陳毅副総理はじめ廖承志、張奚若、茅盾、梅蘭芳、傅抱石ら諸氏が出席。

◎7月 中島健蔵理事長、中島京子夫人、白土吾夫氏訪中。中国人民対外文化協会の招請。北京で「両国人民間の文化交流に関する共同声明」に調印、中国側署名者は陽翰笙中国人民対外文化協会副会長。廖承志、劉寧一、歐陽

予倩、梅蘭芳、田漢、周而復、呂驥、葉淺予、趙樸初、趙安博、林林、孫平化ら諸氏が同席、周恩来総理と会見。

◎9月 日中交換書道展「現代中国書道展」(主催・当協会、日本書道文化連合会、毎日新聞社)が日本橋・白木屋画廊で開催、大阪等でも開催。訪中公演日本新劇団(団長・村山知義、副団長・杉村春子、千田是也、滝沢修、山本安英、秘書・村岡久平の諸氏ら)一行七十名、俳優座、文学座、民藝、ぶどうの会、東京芸術座の新劇五劇団による合同公演「女の一生」「夕鶴」「死んだ海」を公演。「中国を描く前田青邨展」(主催・当協会、朝日新聞社)日本橋・高島屋で開催。

岸内閣は日米安保条約改定を強引に押し進め、これに憤慨する広範な国民が大規模な反対運動を展開した。東大生樺美智子氏が、警官隊との乱闘の中で死亡。三日後、国会を国民が包囲している中で条約は自然承認された。政府内の自衛隊出動の要請に対し赤城宗徳防衛庁長官は固く拒否、自衛隊は出動しなかった。後年、樺美智子氏の母、樺光子氏が亡くなったとき、赤城氏はその葬儀に花を送ったという。安保闘争が一区切りとなった十月、浅沼稲次郎社会党委員長が日比谷公会堂の演説会壇上で右翼の少年に刺殺された。協会では、交流の爆発的增加に伴い、四人の事務局員を、六人に増やした。

(九十九)



劇団前進座訪中公演 「俊寛」・「鳴神」と「佐倉宗吾郎」・「勸進帳」の二本建て四本の演目をもつての訪中公演は、新中国成立後、日本の伝統演劇の優れた作品を紹介するものとして当時大きな脚光を浴びた。舞台上で公演の成功を喜びあう訪中公演団長の河原崎長十郎氏(左)と廖承志氏

——1960年2月15日 北京・首都劇場



第三次訪日日本作家代表团、陳毅副総理と会見 (前列左から)大江健三郎、開高健、竹内実、松岡洋子、野間宏、陳毅副総理、亀井勝一郎、楚図南(中国人民对外文化協会会長)、孫平化(同副秘書長)、(第二列左から)白土吾夫、西園寺公一、廖承志(中国アジアアフリカ団結委員会主席)、茅盾(中国作家協会主席)、老舍(同副主席)、陽翰笙(中国人民对外文化協会副会長)、邵荃麟(作家協会副主席)、林林(中国人民对外文化協会副秘書長)、(第三列左から)周而復、楊朔、李英儒の諸氏。上海では毛主席、周総理と会見

——1960年6月6日 北京



中国美術家協会を訪問し、葉浅予副主席(左)、華君武秘書長(中)と懇談する中島健蔵理事長

——1960年8月2日 北京



日本帝国主義についての陳毅副総理の談話 1960年、陳毅副総理(中)は亀井勝一郎副理事長(右)に「日本軍国主義の弾圧を受け投獄された亀井先生が、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私たちは忘れないと考えている。これは美談です。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れないということになれば悲劇です」と語った。写真は1964年の時のもの。通訳の劉徳有氏(左)と

——北京



初めての新劇訪中公演 俳優座、文学座、民藝、ぶどうの会、東京芸術座の五劇団合同の訪中公演が実現した。総勢七十名、五十八日間の旅程であり、国交正常化前としては画期的な事業であった。歓談する(右から)夏衍、岸輝子、田漢、杉村春子の諸氏

——1960年10月 北京



中国への出発の前に羽田空港でつろぐ「中国文字改革視察」学術代表团一行。(左から)土岐善麿団長、実藤恵秀、倉石武四郎、原富雄、有光次郎、宮沢俊義、高杉一郎の諸氏

——1960年3月28日 東京 中島健蔵氏撮影